

家族造形法を使った事例検討

家族造形法の深度

その3

早樫 一男

〇はじめに…。

これまで2回は家族造形法の基本の紹介でした。今回からは、「家族造形法を使った事例検討」を紹介することにします。

基本的な進め方はいたってシンプルです。事例提出者（以下、提出者）が彫刻家になります。それぞれの家族の役割は参加者の中から選びます。そして、提出者が彫刻家となって、面接で語られた家族を造形という形にして創りあげていくのです。

提出者にとっては家族全員を配置することによって、家族というシステムの中の個人について、視覚的に確かめることができることとなります。

また、造形は家族の関係を具体的な位置や姿勢として表すこととなります。提出者は家族を創りながら、家族の関係に気付くチャンスが与えられているといってもいいかもしれません。

さらに、家族一人ひとりの表情、視線、手

の動き等も創っていきます。家族にとっては“からだ”を通して家族を感じることにつながる感覚的な体験にもなります。

造形が完成後、その感覚的な体験をそれぞれの声や言葉を通して確かめていくプロセスはとても興味深いものです。これまでなら、面接をしている特定の家族の語りを聴くだけであったのが、それぞれの立場に立っての語りを聴くことができ、新鮮な発見がたくさん生まれるのです。

もちろん、家族の役割を引き受けた参加者にとっても、家族のことを考えるととても不思議な時間・空間が創りあげられていくこととなります。

家族造形法を使った事例検討は、ダイナミックであり、ライブ感覚であり、そして、ボデーワークのようでもあるといった、さまざまな要素を含んでいる事例検討法です。

ライブを紙面で再現することはなかなか難しいところですが、今回はある研究会での様子を紹介することにします。なお、事例に

については、一部修正・変更など、再構成してあることをお断りしておきます。

○事例について…。

提出者が家族に関する情報や提出の意図を簡単に説明するところから始まりました。

提出者はホワイトボードにジェノグラムを作成しながら、母方祖父母、母、母の弟（おじ）、本人（姉）、弟の6人家族についての情報を簡単に語っていきます。

本人は10代の中頃から身体症状を訴え、自宅から殆ど出たことがないまま家にいます。

「どうなったら本人が今よりも楽になったり、前向きになっていけるかについて、家族それぞれの思いも確認することによって、これからの援助に何かアドバイスとかヒントになるようなことが手に入ったらいいなあ」というのが提出者の思いです。

「正解はないが、参加者からのいろんなコメントやアイデアをもらいましょう」というファシリテーターの言葉によって、家族造形が始まりました。

○家族を創っていく、置いていく…。

それぞれの役割を担う人が提出者によって指名されます。家族情報の捕捉が行われた上で、提出者が彫刻家役となり、一人ひとりのメンバーを粘土に見立てて、ゆっくりと創っていきます。一連のプロセスを見ているオブザーバー役もフィードバックの際には、重要な役割を果たすことになります。

最初に選んだのは本人（役）です。ゆっくりと部屋の真ん中に置きます、視線は下向きで、両手には力が入り、構えた姿勢です。

次に選んだのはお母さん（役）。娘の左横に座り、右手は娘の左腕の方に近づこうとしています。視線も本人の方を向いています。

三人目は弟（役）が選ばれました。母と姉に背を向け、家族の外を見ているといった感じの姿勢で座っています。提出者からは「楽な姿勢でいい」という指示が追加されました。



(写真解説)

左から本人、母、背を向けている弟

次に選ばれた祖母（役）は椅子に座って、本人と母の方を向いています。母の弟（役）は祖母の左後ろに膝をついた中腰となり、本人に向かって左手で指差しています。

最後に祖母の右後ろに隠れるように置かれたのは祖父（役）でした。



(写真解説) 椅子に座っている祖母、祖母の後ろにおじ、祖母の右後ろに祖父、祖母の前には本人と母 (右端)



(写真解説) 静止の時間 後方動いているのはオブザーバー

○静止の時間…。

家族全員の造形が完成したら、しばらくの間、そのまま静止の時間をとります。この時間はそれぞれの胸の中に湧いてくる思いを確かめる貴重な時間なのです。

オブザーバーは、ギャラリーとして、彫刻全体をさまざまな角度から眺めたり、それぞれのメンバーに近いところに位置し追体験したりといった、自由な動きをしながら、家族について考えていく役割を担います。

それぞれの役割を演じている人がここで感じたり気づいたりすることやのコメントが、「here and now」で思いがけない展開となっていくのです。

○それぞれの語りに耳を傾ける…。

静止の時間が終わった瞬間、本人が「泣けてくる」と涙を流し始めました。提出者も自ら創った造形を眺めて、感情が揺り動かされたようです。本人に引きつけられるように、寄り添う位置に動きました。

提出者は創った順番に合わせて、それぞれの語りに耳を傾けていきます。

まずは、本人の語りです。すぐに言葉にはなりません。しばらく、涙とともに沈黙。左横にいる母との間で感じることを語り始めました。身体を通して感じる複雑な感覚や思いなどです。次に、おじさんのアクションに対する思い、祖母に対する思いが語られました。その後、弟や祖父に対しての印象でした。最後に、家族の中にいる率直な感想が述べられました。

祖父に対するコメントを聞いた提出者は「ああそうなんですか…」と意外な様子です。

実は、提出者が予想もしていないコメントが新鮮な気づきや発見になるのが、造形法の興味深いところなのです。



(写真解説) 本人から見た風景の一部
祖母と隠れたような祖父

次は母のコメントを確かめます。母は息子や娘との距離感、祖父母に対する思い、そして家族の中での役割意識等を語りました。ちなみに、祖母は「菩薩のように見える」とのことでした。ファシリテーターは本人に母のコメントについての感想を求めました。



(写真解説) 母から見た風景の一部 左から祖父 祖母 兄 (本人のおじ) 娘

○外から見た家族、内に入って感じた家族…。

オブザーバーに感想を尋ねてみました。

お母さんについてのコメントの後、オブザーバーは「家族を一人ずつ、造形として置いていくにつれて、場面が変わっていく感じがあった。おばあさんについては、母の菩薩という言葉にはすごくびっくりした。外から客観的に見ていると、ものすごく偉そうで、近い距離で統治して、ある種、規範的なまなざしで見ているのに、母のコメントは意外であった」

提出者は「最初は思わなかったのだけれど、すごく、うまく置けたかもしれない」との感想。オブザーバーは、その後、弟のポーズや祖父の楽なポジションについて、コメント。また、それぞれのメンバーの横に立って見た時やみんなの姿勢になった時の感想と、外から客観的に見た時の感想についても語りました。

オブザーバーは、造形のプロセスを外から客観的に見ることができます。一方で、静止の時間には、各家族の横に位置し、同型の姿勢をとって感じ取る主観的、感覚的な機能も触発されることがあるのです。

そして、この両者のスタンスからのコメントと家族のコメント、提出者のコメントとが混ざり合っ、さらに、新たな発見が生まれ、家族造形法を使った事例検討ならではないのです。

○さらに、家族の語りに耳を傾けると…。

祖母が語ったのは、本人の表情を見ての感想、母に対しての思い、母と本人との姿勢からの感想、そして、自分自身の身体感覚などです。祖母の言葉に対して、本人やファミリーテーターからのコメントが加わりました。



(写真解説) 祖母から見た風景の一部 母、本人 弟

次は弟です。彼は母の言葉を聞いての感想をまず語りました。ほとんど見えない姉、祖父母等への思いも語られました。最後は弟自身の思いや姿勢から感じることでした。

祖父、おじも他の家族への思いや自分自身のスタンスなどについて語っていきました。



(写真解説) 祖父から見た風景の一部 左から祖母(椅子) 本人、母、弟

興味深いコメントが出てくるに従い、随所で家族役による交流や提出者も交えた検討が自然に深まっていきます。それは、家族造形法を使った事例検討の面白さでもある。



(写真解説) おじから見た風景の一部 おじは左手を前に本人、母の方向を指している

提出者が改めての感想を述べました。「この中にいるだけでも本人はしんどそう。客観的に言えば、作り手としてはよく作れたと思う。みなさんのフィードバックはとても参考になりました」



(写真解説) フリーターキングの一こま 左から弟 母 祖父 本人 (右端) 弟と母の間
にしているのはオブザーバー

○その後は…。

改めて、各メンバーのフィードバック（追加）を確かめた後、後半は今後の援助の方向性について、フリーターキングが展開されましたが省略します。

最後に、役割解除の儀式を行い、ラスト一言を分かち合って、研究会は終了しました。参加者それぞれにとって、大変、印象に残ったケースのようでした。

○改めて、提出者の感想です。

この研究会に参加させていただくようになり、何年にもなりますが、毎回新しい発見

があります。これまでは、クライアント本人を取り巻く家族の状況や家族それぞれの思いを整理したい時、家族の力動が絡んでクライアント本人へのアプローチだけでは解決の糸口が見えない時、家族の転入・転出や変化があって家族力動がどうなっていくのかという見通しを得たい時に、ケースを提出し、メンバーの皆さんからヒントやアドバイスをいただけてきました。今回は、家族それぞれがしんどさを抱えている家庭で、クライアント本人が動き出したいけど動き出せないという状況の中、どのようなサポートがあれば本人が動き出せるのかというヒントが得たく、ケースを提出させていただきました。

家族を造形していくにあたり、本人を取り巻く家族システムを視覚的に捉えられるこ

とや、提出者自身が家族と同じ姿勢を取って
みることで、家族力動を体感することができ
ました。「こんな姿勢をとっていたら、肩に
力が入るだろうな…」「こんな距離感だつた
ら、圧迫感があって動けないよな…」「意外
と〇〇さんの位置からは、家族全員が見えて
いるな」などの気づきと、役割を演じたメン
バーからのフィードバックを重ねあわせ、本
人と家族のしんどさを再確認したり、本人と
家族のリソースが見えてきました。面接中に
クライアント本人から得てきた家族の情報
が、それまでは点と点だったのが、メンバ
ーからのフィードバックにより線となり面と
なり、臨場感を伴った理解（＝共感）につな
がっていくような感覚でした。

また、カウンセラーとして自分はこの家族
のどの位置に立っているのか、できあがった
造形に自分を彫刻として加えてみることも
できます。今回は本人役のフィードバックか
ら感情が揺さぶられ、思わず私から本人に寄
り添いましたが、これも私自身の今ある立ち
位置と距離感を確認することになりました。
今後の援助の方向性だけではなく、クライエ
ントの家族システムに自分がどう加わって
いるかの確認にもなったと感じています。

何よりも今回の大きな収穫は、提出者自身
が造形することにより、エンパワーされたこ
とです。メンバーそれぞれが家族のしんどさ
を体とこころで感じ、訴え、共有すること、
そしてこれからどうなっていったら援助の
役に立つだろうかと、頭とこころを寄せて共
に考えていただきました。メンバーの皆さん
に、本人と家族の思いを共感していただいた
ことは、私自身の支援のパワーとなり、希望
を持ちながら関わり続けていくことの大切
さに気づかされました。本当にありがとうご

ざいました。

〇おわりに…。

今回の掲載について協力いただいた事例
提出者を始め、研究会のメンバーにお礼申
し上げます。